

「ウェルビーイング」を創り出そう！



「子どもも先生も一人一人が幸せや生きがいを感じ、保護者も地域も幸せや豊かさを感じられる良い状態にある学校」には、どんな良いことがあるのでしょうか、そうなるにはどうしたらよいのでしょうか。

8月8日(木)、「温かく楽しい誰が行きたくなるウェルビーイングな学校づくり研修」を実施しました。学校の管理職、地域青少年育成会議のコーディネーター等、合わせて75名が参加し、理論と実践を学びました。研修の感想（一部抜粋）を紹介します。



様々な理論とそれに関わる因子等もなるほどと思うことが多くありました。子どもにも分かってもらえる内容だったと思いました。管理職としてウェルビーイングとして職員に投げ掛けることは、職員が子どもに投げ掛けることにつながる。だからこそ、子どもの姿として成果があるのだらうと思いました。(校長)

子どもたちの笑顔を生み出すのは教職員の笑顔。教職員がいきいきと教育活動に取り組めるよう管理職として努めたい。(教頭)

今回のお話をお聞きして、学力向上や働き方改革、教職員を目指す若者の増加、何よりも子どもと職員の幸せのための具体的な方法をお聞きできたことがよかった。(校長)

今回じっくり話をお聞きすることができ、大変勉強になりました。特に、実践については、「紙面カエル会議」「言葉のシャワー」などすぐに取り組みそうな話があり、やれるところから取り入れてみたいと思いました。(教頭)

家庭、職場、地域、自由な団体など、すべての団体の中でウェルビーイングの考え方を取り入れていけると感じました。ウェルビーイングの考え方を取り入れる学校が増えていったら、地域も先生も子どもも幸せになれるなあとうれしくなりました。(地域コーディネーター)

子どもたちが楽しいな、幸せだと思える活動を創っていききたいと思います。ウェルビーイングは学校だけでなく、自分の職場や家庭でも当てはまることがあると思い、負の感情になったときもハピネスブスターで乗り切りたいと思いました。(地域コーディネーター)

どの参加者の感想にも大きな学びの実感があり、実践への意欲が読み取れました。これからの学校づくりや地域づくりに役立つ素晴らしい学びの機会になったと喜んでいきます。

終わりに、研修で学んだ誰もが実践できるウェルビーイングへのポイントを紹介します。

1 表情→ **笑顔で** 2 姿勢→ **胸を張って** 3 言葉遣い→ **ポジティブ変換で**

特に言葉遣いでは、悪口、不満、「5D」の言葉は慎みましょう。ネガティブになります。

「5D」とは「でも～」「だって～」などDが付く言葉です。どうやら、一人一人の意識と実践で、「ウェルビーイング」は創り出せそうです。(文責：教育センター所長 竹内 学)

「所報」は、教育センターのホームページでも公開しています。ご覧ください。

教育センターの
ホームページの
QRコードです。
ご活用ください。



主体的な
学びを！

研修会の”舞台裏”～8.2 鹿毛先生と語る真夏の研修会 in オーレンプラザ～



写真1

写真右から 講師:鹿毛雅治教授(慶応義塾大学)、金子千恵研究主任(保倉小)、松田和樹研究主任(直江津南小)、倉又圭佑研究主任(大町小)、上原希研究主任(大和小)、司会:高橋栄介(学校教育課)、記録:田中行人教諭(有田小)

◆ なぜ、この研修会を企画したのか？

子どもが主体的に学ぶためには、教師が主体的に学ぶことが重要です。そこで本研修は、「子どもが主体的に学ぶ授業づくり」と「教師が主体的に学ぶ校内研究づくり」を一体的に取り扱う内容とし、その具体例や方法論をできるだけ多くの先生と共有しながら対話的に学べるようにしました。多くの方から主体的に参加してもらうため、夏休みにオーレンプラザで実施しました。当日は、教諭・管理職を含め92名の先生方が集まりました。

◆ なぜ、鹿毛先生を呼んだのか？

鹿毛先生の書名「子どもの姿に学ぶ教師」「子どもとともに主体的に学ぶ場を創る」「教師が学び合う学校を実現する」が示すように、鹿毛先生のお考えは、上越市の学校教育の考え方と合致しています。鹿毛先生からは「市のビジョンと研修企画の趣旨に心より共感いたします」と喜んで講師を引き受けていただきました。

◆ なぜ、鹿毛先生の講演だけにしなかったのか？

中央から高名な先生をお呼びした研修は、「講演が9割5分」になりがちです。しかし、これでは「主体的・対話的で深い学び」とは言えません。そこで、本研修では、参加者が主体的・対話的に深く学ぶことが



写真2

ができるよう、鹿毛先生の基調提案【Ⅰ部】を30分間とし、研究主任とのパネルディスカッション【Ⅱ部】(写真1)を60分間、小グループでのセッション(対話)【Ⅲ部】(写真2)を30分間設けました。参加者からは、「今回の研修形式はよかった」「研究主任の生の言葉を聞けてよかった」「参加者同士で話す研修が楽しかった」などの感想が聞かれました。

◆ パネルディスカッションで何が、話し合われたのか？

参加者から事前に質問を受け、研究主任と鹿毛先生がライブでやりとりをしました。

Q「～したい」という欲求を高める働きかけはできますが、「やり遂げよう」「考え抜こう」という意志を育てるためには、どのような働きかけが必要でしょうか？

Q 教師の主体性を生み出す校内研究にするには、どのようにすればよいですか？また、教師の主体性があふれる学校・職員室をどのようにつくっていけばよいでしょうか？

子どもも教師も「やってみたい」(意欲、欲求)だけでなく、「やるべきだ」(価値、意味)、「やれそうだ」(可能性、見通し)という3つの要素が主体的な学びに必要なだと話題になりました。



多様な子どもが生き合い学び合う学校づくりには、
わたしたち一人一人が、自分も相手も共に異質であることを前提に、
心を寄せて話し合うことが大切です。



8 月終わりに「多様な子どもが生き合い、学び合う学校づくり」と題して東京学芸大学教授の
原 瑞穂先生を講師に招き、研修会を行いました。

日本国内では、外国人人口がここ数年で増加傾向にあり、上越市内の学校でも CLD 児
(Culturally Linguistically Diverse Children＝文化的・言語的に多様な背景を持つ児童)
が増えています。研修を通して、CLD 児も含めて「多様な子どもが生き合い、学び合う学校づ
くり」について考えました。

「どうして日本に来たの?」「外国人」「日系人」「外人」「もう日本人だね」「かわいい」

上の言葉は、CLD 児が他者に言われて嫌だったと教えてくれた言葉だそうです。言う側はそ
う思っていないくても、当事者は言われ続けています。その中で、自分の異質性を感じ、葛藤
する、と聞きました。「かわいい」と言っている側は、悪気はないと思います。でも受け取る
側はそうではないことを改めて知りました。実際の経験者の言葉も研修の中で聞きました。

「偏見や差別が大人から持ち込まれている」現実を知りました。衝撃的でした。

私たちは、社会の大多数の集団に属していることが多く、自動的に受けられる恩恵＝「特
権」をもっています。生まれたところの集団だからこそ、自覚することがほとんどありませ
ん。「無自覚」です。そのことを認識し、そのことにしっかりと眼を向けないと、私たちも「偏
見や差別」を作ってしまう。

では、どうやって「分かる/分かり合う」のか。原先生は「理解できる、理解できないで考
えてしまうと分断を生んでしまう。『分からない/分かり合えない』ことを前提に『分かり合
えない』ときも『いっしょにいる』『話し合う』ことが大切である」と話していました。「尋ね
る・質問する」は「分かろうとする」という姿勢の表れ、「答える・説明する」は相手が「分
かっていない」と感じる時の行為です。いずれも、日々相手の表情や言葉に心を寄せてい
くことが大切なことを意味しています。今回の研修は CLD 児だけにあてはまるのではなく、
それぞれに違った背景を持つ一人一人の子どもを観るところにつながっていくものでした。

参加者の感想（一部抜粋）を紹介します。

◇職員はややもすると、子どもの置かれている状況よりも自分の価値観で、自分の枠に当てはめ
ようと必死になってしまうことがあります。個々を大切に、個々の困り感に寄り添うことが大
切である、ということを職員で理解し、共有していきたいと思いました。

◇外国にルーツをもつ児童を含め、多様な子どもが当たり前に在籍する時代になってきています。
自分自身の特権意識についても、無自覚な中でのこれまでの経験を改めて考える、よい機会と
なりました。子ども同士が「分かり合う」、「やさしさやお互いを受容する」関係となるために
は、時間はかかってもやはり話し合うことを大切にしていきたいと思います。

“「わたし(A)」も変わり、「あなた(B)」も変わり、

そのプロセスにおいて、新しい価値なりルールや制度(α)が生まれる “

$$A+B=A'+B'+\alpha$$



「カウンセリング研修講座で力量アップ!」～夏期カウンセリング研修～



夏期カウンセリング研修にたくさんの方から参加していただきました。講義及び感想を紹介します。

◆7月30日(火) 通常の学級における特別支援教育 ～発達が気になる子への指導と支援の事例から～

講義の要点

講師 上越教育大学教職大学院 関原 真紀 准教授

少子化による児童生徒数の減少傾向がある中で、特別支援教育の対象はこの10年間増加している。今回の研修では午前中に講師より「特別支援教育の理念」等についての講義があり、小中学校の実践に関する事例説明があった。午後は事例をもとに「実態把握を協働で行う演習」をグループごとに行った。積極的な話し合いが行われ、いくつかのグループが発表をした。学級担任だけでなく、職員間で情報を共有した上で指導目標を決め、指導内容を設定し、組織的に指導に当たることを学んだ。

◇感想

特別支援教育について事例を踏まえ、分かりやすく教えていただき、大変ありがたかったと思います。

適切な支援をするには、正確な実態把握が大切だということを再認識しました。学級担任だけでなく、複数の職員の目で見ること、より深く、広く実態把握ができることを学びました。

◆7月31日(水) 『生徒指導提要(改訂版)』が示す生徒指導・教育相談の方向性と進め方 ～いじめ理解に基づく防止対策を中心に～

講義の要点

講師 関西外国語大学 新井 肇 教授

現在、学校には解決困難な生徒指導上の課題が山積している。これからの生徒指導・教育相談には、児童生徒の成長・発達を支える生徒指導の展開、学習指導との一体化による自己指導能力獲得への支援、チーム学校による生徒指導体制の構築等が求められる。学校は、同僚性を土台に協働性を高めるとともに、多様な職員が安心して意見を出し合える心理的安全性を確保し、組織として自らの実践を絶えず省察し、次の実践に生かすことのできる「学習する組織」であることが求められる。

◇感想

近年の子どもたちが抱える課題やその背景について、データを基に分かりやすくお話しいたいただき、提要改訂に込められた思いや、生徒指導・教育相談の方向性を理解することができました。いじめを生む構造や、「いじめをしない人に育つ」視点等を生かして、児童生徒が多様性を認め、自己指導能力を獲得できるように支援していきたいと思います。

◆8月1日(木) 子どもの心の不調の見立て方と支援のプランニング～BPSモデルを踏まえて～

講義の要点

講師 柏崎市子ども未来部子どもの発達支援課 小林 東 課長

コロナ禍のストレス関連症の増加や社会・家庭状況の変化等により、他機関との連携を要するケースが増加している。これら子どもの心の不調は、特徴、背景、要因が異なり、適切な評価と対応が求められる。子どもの心の問題をどう捉えるか、見立てにつながる大切な情報をチームで無駄なく収集し、効果的な支援会議やケース会議を実施することが重要である。有効な支援方策を実施するために多職種が連携し、BPS「生物・心理・社会」モデルを踏まえた計画の作成が有効である。

◇感想

医療・教育・福祉等様々な分野で取り組まれた豊富な知見に基づく愛着障害や自傷行為などのアセスメントや対応の留意点～してはいけない対応・してもよい対応～が参考になりました。

グダグダな支援会議にならぬようアセスメントシートを活用したり、BPSモデルをもっと詳しく学んだりしたいと思います。

冬期カウンセリング研修

- | | | | | |
|--------------|-------------------------|--------|-------|------|
| 12月25日(水) 一日 | 協働学習とインクルーシブ教育を支える学級の耕し | 早稲田大学 | 伊佐 貢一 | 客員教授 |
| 12月26日(木) 午前 | 不登校児童・生徒の理解と支援 | 東京家政大学 | 相馬 誠一 | 名誉教授 |
| 12月26日(木) 午後 | 学校・学級が変わる：学校規模ポジティブ行動支援 | 金沢学院大学 | 佐田東 彰 | 教授 |

参加申込締切は11月15日(金)です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

